

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

令和5年度（2023年度）発生予報第6号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和5年度（2023年度）病害虫発生予報第6号（9月予報）

I 気象予報：令和5年（2023年）8月24日福岡管区気象台発表

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	10	20	70
	降水量	20	40	40
	日照時間	40	40	20

II 【今後、注意すべき病害虫】

1 発生の概要

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
普通期 水稻	穂いもち	並	並	やや少 (-)	やや多～ やや少(±)	気温高(-) 降水多～並 (+)	巡回調査 防除員報告 (葉いもち)
	紋枯病	並	並	並(±)	やや多～ やや少(±)	気温高(+) 降水多～並 (+)	
	トビイロ ウンカ	やや少	並	少 (-)	並～少 (-)	気温高(+)	
大豆	ハスモン ヨトウ	並	並	ヨウムシ類 白変葉 並(±)	並(±)	気温高(+)	フェロモン トラップ調査 合志市 やや少 八代市 少 山都町 少 阿蘇市 少 (-)



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」

作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
大豆	カメムシ類	並	やや少	やや少 (-)	並(±)	気温高(+)	
茶	炭疽病	やや少	並	やや少 (-)	やや多～並 (+)	降水多～並 (+)	
	カンザワハダニ	並	並	並(±)	並～やや少 (-)	気温高(+) 降水多～並 (-)	御船町 やや少(-)
	チャノキイロ アザミウマ	並	並	並(±)	並(±)	気温高(+) 降水多～並 (-)	たたき落とし調査 御船町 多(+)
	チャノミドリ ヒメヨコバイ	やや多	やや多	並(±)	やや多(+)	気温高(+) 降水多～並 (-)	たたき落とし調査 御船町 多(+)
	クワシロ カイガラムシ	並	並	やや少 (-)	並(±)	気温高(+) 降水多～並 (-)	
カン キツ	黒点病	並	やや多	並(±)	やや多～並 (+)	降水多～並 (+)	宇城市 平年並(±)
	かいよう病	やや多	やや少	やや多 (+)	やや多～並 (+)	降水多～並 (+)	宇城市 平年比少 (-)
	ミカンハダニ	やや少	並	やや少 (-)	やや多～並 (+)	気温高(+) 降水多～並 (-)	宇城市 平年比少 (-)
	チャノキイロ アザミウマ	並	並	並(±)	並～少(-)	気温高(+) 降水多～並 (-)	黄色粘着板調査 熊本市河内町 平年比やや少(-)



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」

作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
ナシ	黒星病	やや少	並	やや少 (-)	並(±)	降水多～並 (+)	
	ハダニ類	並	やや多	並(±)	並～やや少 (-)	気温高(+) 降水多～並 (-)	
果樹 全般	果樹 カメムシ類	やや多	多	—	カンキツ 並～少(-) ナシ 多～やや少 (+) カキ 並(±)	気温高(+)	予察灯調査 急増(+) 口針鞘数・ ビークリング調査 並(±)
夏秋 トマト	灰色かび病	やや少	やや多	少(-)	やや多～並 (±)	気温高(-) 降水多～並 (+)	
	葉かび病	やや多	並	やや多 (+)	並～やや少 (±)	気温高(-) 降水多～並 (+)	
	うどんこ病	並	少	やや少 (-)	多～やや多 (+)	気温高(-) 降水多～並 (±)	
	すすかび病	並	やや少	並(±)	並～やや少 (±)	気温高(+) 降水多～並 (+)	
イチゴ	炭疽病	並	並	並(±)	並 (±)	気温高(+) 降水多～並 (+)	
	ハダニ類	やや多	やや多	多(+)	やや多～並 (+)	気温高(+)	



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」

作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
イチゴ	アブラムシ類	並	並	並(±)	並(±)	気温高(+)	
夏秋 キュウリ (高冷地)	べと病	やや多	やや多	—	やや多(+)	気温高(-) 降水多~並 (+)	
夏秋 果菜類 (平坦地)	コナジラミ類	並	並	—	ナス、メロン やや多~並 (±)	気温高(+)	黄色粘着板 トラップ調査 (8月上旬) 熊本市 やや少 山鹿市 やや少 菊池市 やや少 (-)
	アザミウマ類	並	並	—	ナス やや多~並 メロン 並 (±)	気温高(+) 降水多~並 (-)	
	ハスモンヨトウ	並	並	イチゴ 並 トマト 並 (±)	ナス やや多~並 イチゴ やや多~並 トマト 並 (±)	気温高(+)	フェロモン トラップ調査 合志市 やや少 八代市 少 山都町 少 阿蘇市 少 (-)
	オオタバコガ	並	並	トマト 並 (±)	ナス やや多 トマト 並 露地キク 並 キャベツ 並 (±)	気温高(+)	フェロモン トラップ調査 合志市 やや少 八代市 やや少 阿蘇市 やや多 山都町 並 (±)

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」

2 予想発生量、根拠、対策等

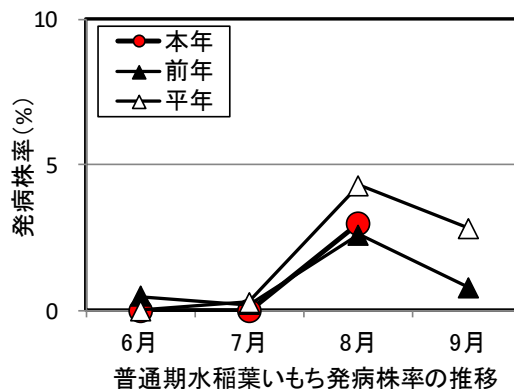
◎普通期水稻

1) 穂いもち

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、葉いもちの発病株率3.0%（平年4.3%）と、平年比やや少の発生であった（－）。

(3) 対策 ア ほ場を観察し、上位葉で葉いもちの発生がみられる場合は穂いもちの発生源となるので、直ちに薬剤防除を行う。

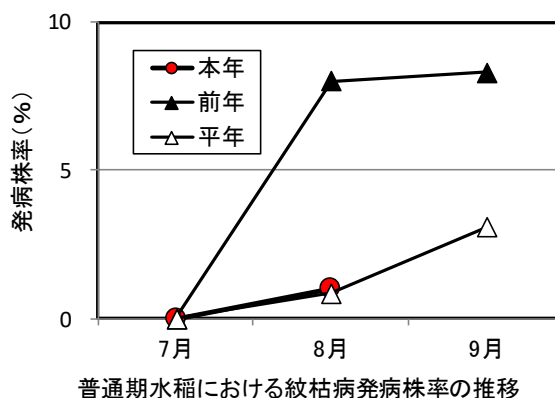


2) 紋枯病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病株率1.0%（平年0.9%）と、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 出穂期以降高温が続くと上位葉鞘に病斑が進展するため、発生が見られる場合は防除を行う。



3) トビイロウンカ

(1) 発生量：やや少

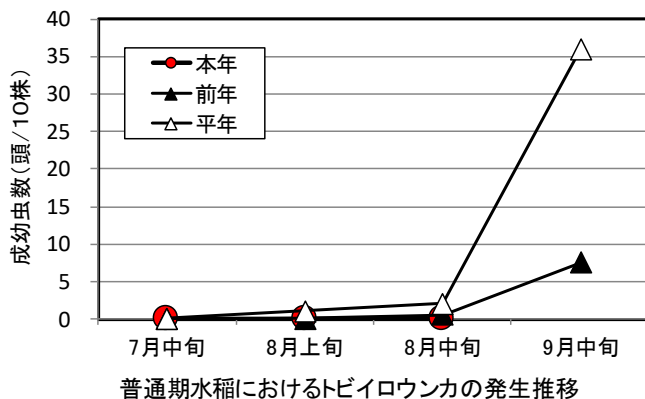
(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発生は認められず（平年2.1頭/10株）、平年比少の発生であった（－）。

(3) 対策 ア ほ場での発生状況に注意し、要防除水準（収穫30日前30頭/10株）に達したら直ちに防除を行う。

イ 水稻の株元に生息しているので、粉剤及び液剤で防除する場合は株元に達するように散布する。

ウ トビイロウンカに効果がある箱施薬剤を使用していないほ場では発生に注意し、適期防除に努める。

エ 飼料用米等の多肥栽培や栽培期間の長い品種では、特に多発する傾向があるので、発生が多い場合は追加の防除を行う。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

◎大豆

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、ヨトウムシ類食害株率は25.4%（平成22.1%）、幼虫数は2.8頭/10株（平成1.7頭/10株）と平成並の発生であった（+）。

イ フェロモントラップによる8月第1半旬～第5半旬（※八代市は第4半旬まで）の誘殺数は、合志市で平成比やや少、八代市、阿蘇市、山都町で平成比少の発生であった（-）。

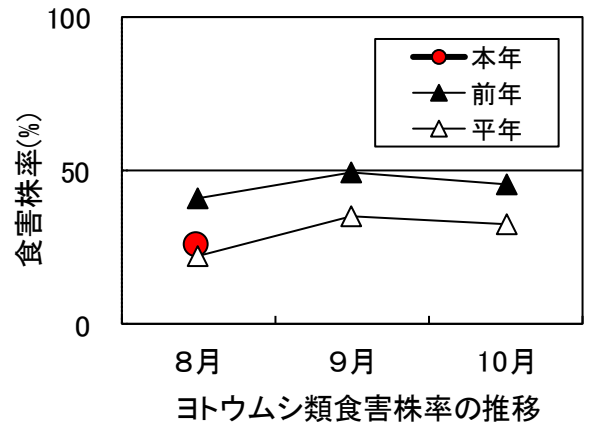


表 各地域のハスモンヨトウの誘殺状況（8月第1半旬～第5半旬）

市町村名（地域名）	本年	平成値	平成比（%）
合志市（栄）	423.0	770.6	54.9
八代市（鏡）※1-4半旬	81.3	772.3	10.5
阿蘇市（一の宮）	508.9	1044.7	48.7
山都町（鶴ヶ田）	53.1	108.3	49.0

単位：頭、平成比（%）：（本年誘殺数/平成値）×100

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するため、若齢幼虫の食害により白色化した被害葉（白変葉）が認められたら防除を行う。

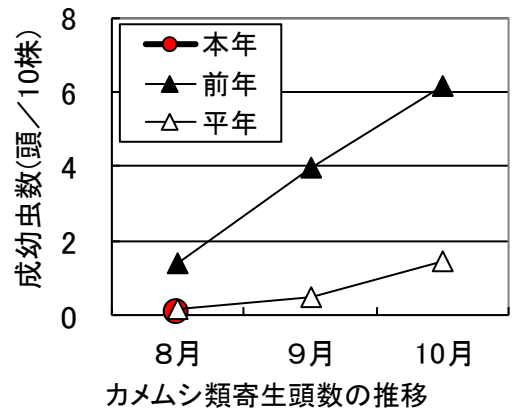
2) カメムシ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、頭数は0.1頭/10株（平成0.2頭/10株）と、平成比やや少の発生であった（-）。

(3) 対策 ア 開花終期から子実肥大期において、7～10日おきに2～3回の薬剤防除を行う。

イ アオクサカメムシ、ミナミアオカメムシに対するピレスロイド系薬剤の効果は劣るので、ほ場での発生種を確認して薬剤を選択する。



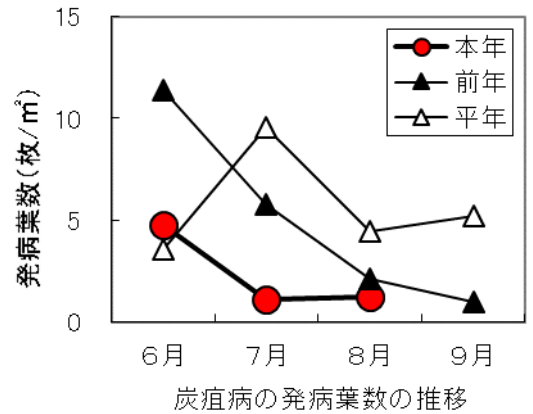
本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

◎茶

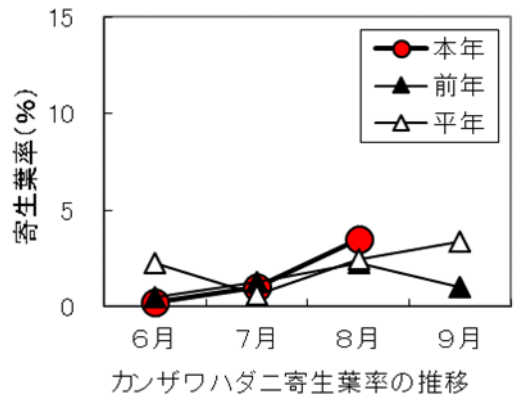
1) 炭疽病

- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病葉数 1.3 枚/m² (平年 5.6 枚/m²) と、平年比 やや少の発生であった (-)。
- (3) 対策 ア 秋期の発生は翌春の一番茶の収量や品質に及ぼす影響が大きいので、摘採残葉の発病状況に注意し、新芽生育期 (萌芽～1葉期と2～3葉期) に2回の防除を行う。
イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。



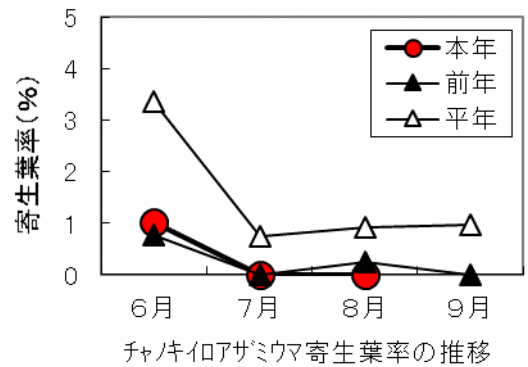
2) カンザワハダニ

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生葉率 3.5% (平年 2.5%) と、平年並の発生であった (±)。
イ 御船町の8月第4半旬の調査では寄生葉率 3.0% (平年 7.0%) と、平年比やや少の発生であった (-)。
- (3) 対策 ア ほ場での発生状況を確認し、密度が高い場合は、規定の散布量で葉裏まで薬剤が届くよう丁寧に防除を行う。
イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



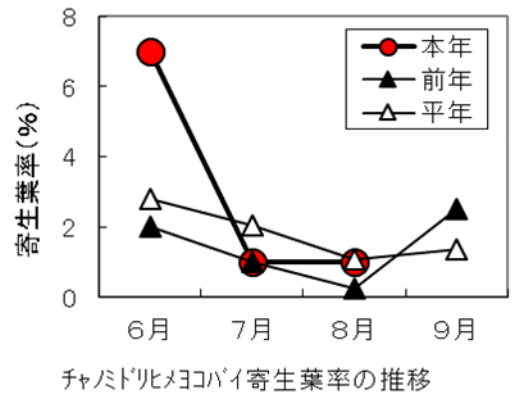
3) チャノキイロアザミウマ

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生は認められず (平年 0.9%)、平年並の発生であった (±)。
イ 御船町のたたき落とし調査では、8月第1～4半旬の捕獲頭数は 435 頭 (平年 126 頭) と、平年比多の発生であった (+)。
- (3) 対策 ア 主に新芽や新葉を加害するので、萌芽期から開葉期に防除する。



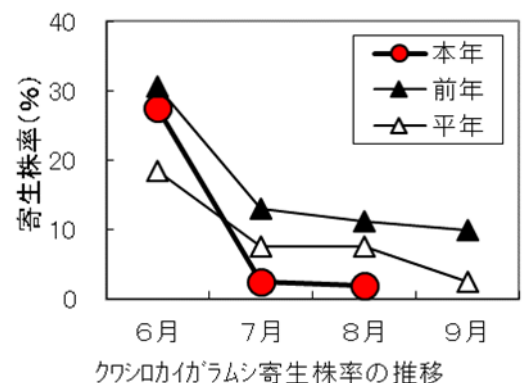
4) チャノミドリヒメヨコバイ

- (1) 発生量：並
 (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生葉率1.0%（平年1.1%）と、平年並の発生であった（±）。
 イ 御船町のたたき落とし調査では、8月第1～4半旬の捕獲頭数は182頭（平年25頭）と、平年比多の発生であった（+）。
 (3) 対策 ア 新芽が加害されるので、開葉期に防除する。多発する場合は開葉初期と2～3葉期に2回防除する。



5) クワシロカイガラムシ

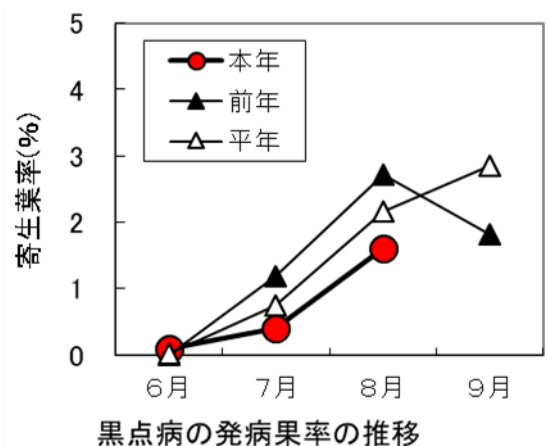
- (1) 発生量：並
 (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生株率1.9%（平年7.6%）と、平年比少の発生であった（-）。
 (3) 対策 ア ふ化最盛日は今後の気温により変動し、地域によってばらつきがあるので、ほ場をよく観察するとともに発生状況に注意して防除時期を判断する。
 イ 幼虫は農機具に付着して分散する場合もあるので、摘採、剪枝等管理作業で分散しないように十分注意する。
 ウ 防除適期は、ふ化最盛期（卵塊全体の60～80%になった時期）で、防除に当たっては規定の散布量を内部の枝まで薬剤が届くよう丁寧に散布する。



◎カンキツ

1) 黒点病

- (1) 発生量：並
 (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病果率1.6%（平年2.2%）と、平年並の発生であった（±）。
 イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、8月第5半旬の発病果率は98.0%（平年99.6%）で平年並の発生であった（±）。
 (3) 対策 ア 保菌率が高い直径5～10mmの枯枝は、伝染源になるので剪除し、園外で処分する。
 イ 前回の散布から累積降水量が200mm～250mmを越えた時期、または25日～30日経過した時期を目安に防除する。



2) かいよう病

(1) 発生量：やや多

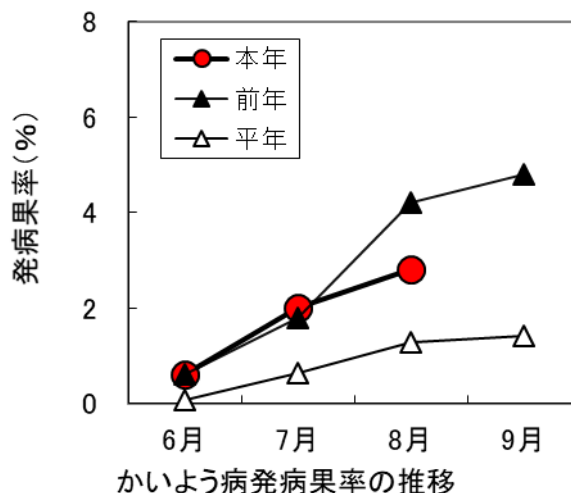
(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では一部地域で発生が多く、発病葉率1.4%（平年1.2%）、発病果率2.8%（平年1.3%）で、平年比やや多の発生であった（+）。

イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、8月第5半旬の発病果率は12.0%（平年44.8%）で平年比少の発生であった（-）。

(3) 対策 ア 伝染源となる発病葉や枝、果実は除去する。

イ ミカンハモグリガの食害痕は、本病が発病しやすいので防除および剪除を行う。

ウ 強風による葉や枝の損傷を少なくするため、防風樹がない園では防風網を設置する。



3) ミカンハダニ

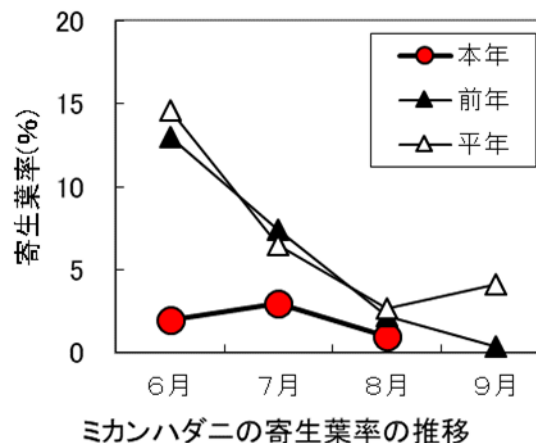
(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、雌成虫の寄生葉率1.0%（平年2.7%）、寄生頭数0.2頭/10葉（平年0.8頭/10葉）と平年比やや少の発生であった（-）。

イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、8月第5半旬の雌成虫の寄生葉率1.0%（平年8.8%）、寄生頭数0.2頭/10葉（平年4.0頭/10葉）と、平年比少の発生であった（-）。

(3) 対策 ア 定期的に園を観察し、雌成虫の寄生葉率が30~40%、または雌成虫の寄生頭数が10葉当たり5~10頭に達した場合は防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。

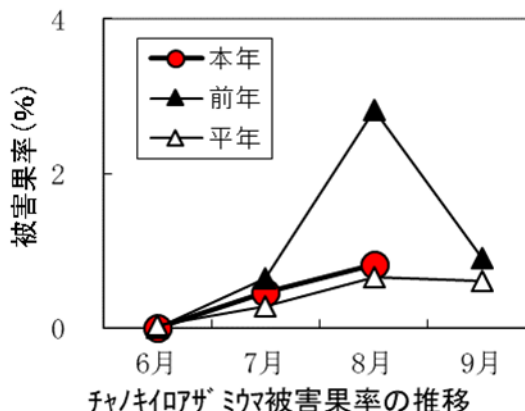


4) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、被害果率0.8%（平年0.7%）と、平年並の発生であった（±）。

イ 熊本市河内町の黄色粘着板調査では、8月中旬の誘殺数が0.2頭/日（平年0.6頭/日）と平年比やや少であった（-）。

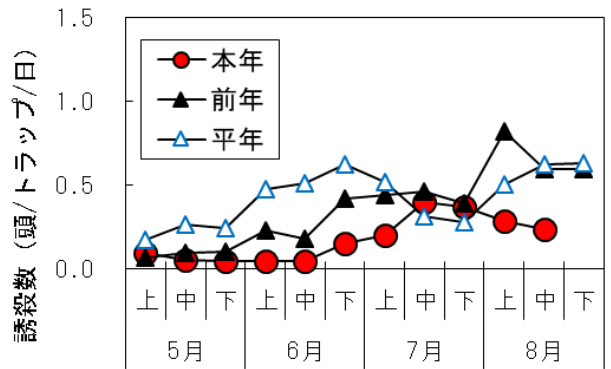


本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

[「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」](https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html)

(3) 対策 ア 平年に比べて羽化最盛期が7～13日早い予測となっているため、下表を参考に早めの防除に努める。

イ 発生調査は、果実(100果)を5,000～10,000倍に薄めた展着液または洗剤で洗い、ティッシュペーパーで濾した後、ルーペや実体顕微鏡で虫数を数える。捕獲された虫数が10頭を越えた場合は防除を行う。



黄色粘着板によるチャノキイロアザミウマ誘殺数の推移 (熊本市河内町)

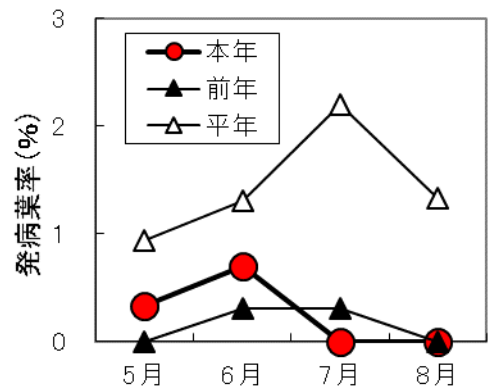
表 チャノキイロアザミウマ羽化最盛期予測結果 (8月25日現在)

地点名	本年		平年 (過去10年の平均)	
	第7世代	第8世代	第7世代	第8世代
熊本	8月27日	9月14日	9月4日	9月24日
三角	9月3日	9月23日	9月10日	10月2日
本渡	9月6日	9月27日	9月18日	10月12日
八代	8月30日	9月19日	9月7日	9月30日
水俣	9月1日	9月21日	9月10日	10月4日

◎ナシ

1) 黒星病

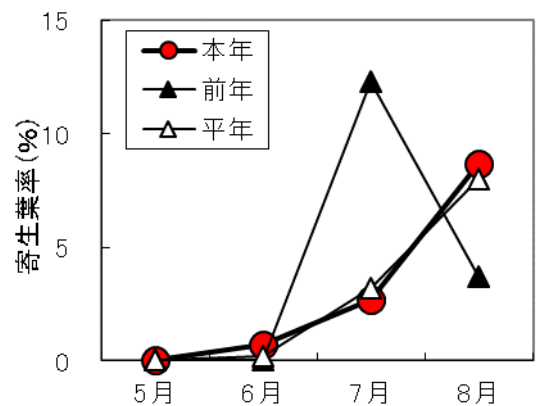
- (1) 発生量: やや少
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病葉は確認されず(平年1.3%)、平年比やや少の発生であった(一)。
- (3) 対策 ア 秋期の降雨によって感染したりん片や葉が翌春の伝染源となるため、収穫後から落葉期(9月中旬～11月中旬)までに2～3回の薬剤防除を行う。
イ 園内の落葉は、越冬伝染源となるため、園外へ持ち出して処分する。



黒星病発病葉率の推移

2) ハダニ類

- (1) 発生量: 並
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、雌成虫の寄生葉率 8.7% (平年8.0%) と、平年並の発生であった(±)。
- (3) 対策 ア 定期的に園を観察し、雌成虫の寄生葉率が30%以上、または雌成虫の寄生頭数が1葉当たり1～2頭に達した場合は防除する。
イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。



ハダニ類寄生葉率の推移



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

◎果樹全般

1) 果樹カメムシ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月下旬におけるヒノキ球果の口針鞘数は6地点平均7.5本/果(平成21.7本/果)と平成比やや少であるが、前回調査より増加している。また、ビーティング調査によるヒノキ球果枝に寄生する成幼虫数は平成並の発生で、前回調査より増加傾向にあるため、今後の果樹園への飛来が増加すると予想される(±)。

イ 予察灯8月の誘殺数は、下図のとおり中旬頃から急増しており、新世代成虫の活動が活発化している(+)。

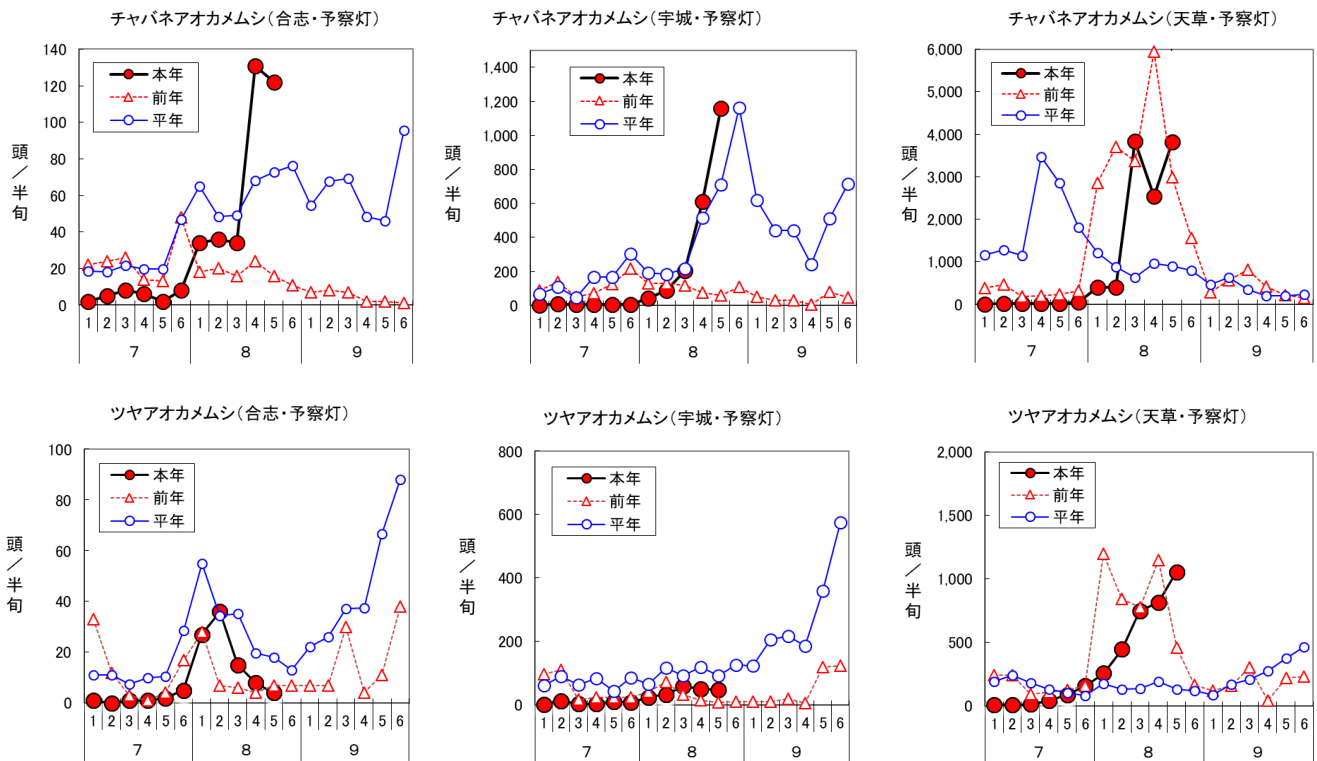


図 チャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシ予察灯誘殺数の推移

(3) 対策 ア 飛来初期は局在し、発見が遅れやすいため、園内をよく見回り、早期発見および発生初期の防除を行う。

イ カメムシ類は夕暮れ時に園外から侵入し、翌朝飛び去るため、夕方や早朝の防除が有効である。

ウ 収穫期間近に薬剤を散布する場合には、薬剤の使用時期に注意する。

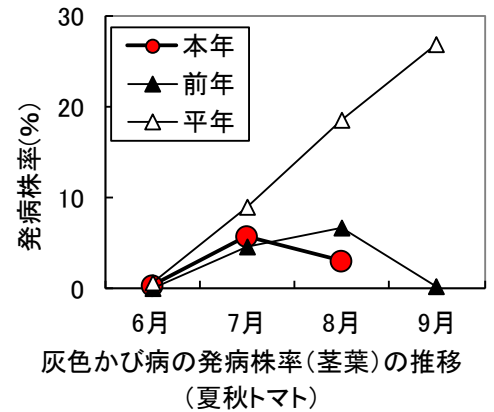
エ チャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシの予察灯及びフェロモントラップの誘殺数データを病虫害防除所のホームページに掲載しているため、最新の誘殺状況を確認し、防除要否や防除適期の参考にする。



◎夏秋トマト

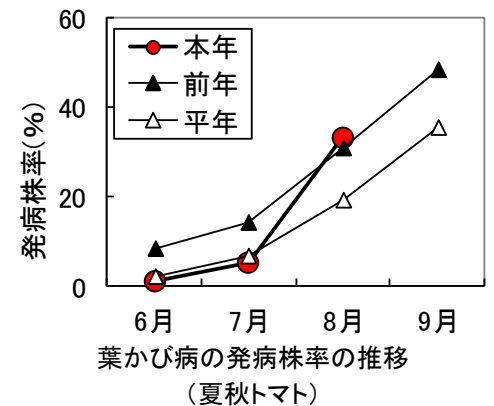
1) 灰色かび病

- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、茎葉の発病株率3.0%（平年18.5%）、果実では発病株率0.3%（発病株率平年0.8%）と、平年比少の発生であった（－）。
- (3) 対策 ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。
イ 被害葉や被害果、老化葉は早めに除去する。
ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



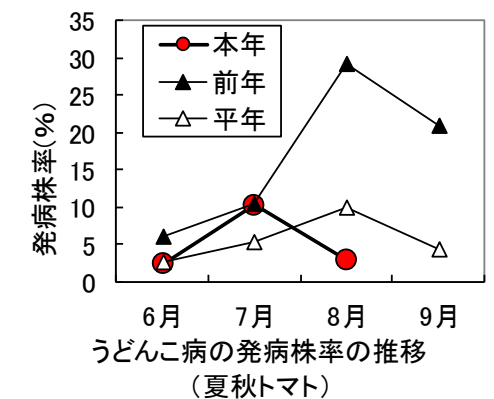
2) 葉かび病

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病株率33.0%（平年19.3%）と、平年比やや多の発生であった（＋）。
- (3) 対策 ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。
イ 被害葉や老化葉は早めに除去する。
ウ 肥料切れや着果負担による草勢低下は、本病の発病を助長するので適切な肥培管理に努める。
エ 9月の秋雨の時期は曇雨天が続くことが予想されるため、気象予報に留意し、晴れ間を見計って計画的に防除を行う。
オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



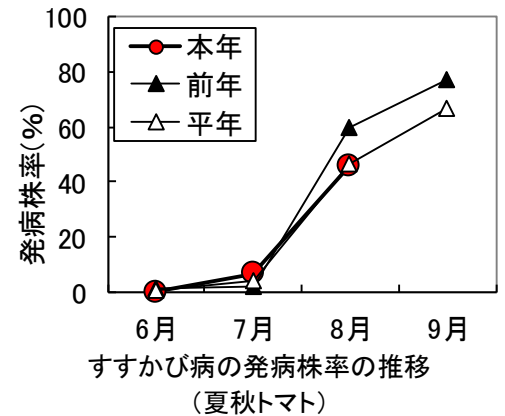
3) うどんこ病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病株率3.0%（平年9.6%）と、平年比やや少の発生であった（－）。
イ 防除員報告では、平年比多～やや多の発生であった（＋）。
- (3) 対策 ア 乾燥条件でもよく発生するので、ハウス内をあまり乾燥させないよう管理する。
イ 発病葉は早めに取り除き、ほ場外で処分する。
ウ 多発すると防除が困難となるため、発生初期の防除を徹底する。
エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



4) すずかび病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病株率46.0%（平年46.7%）と、平年並の発生であった（±）。
- (3) 対策 ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。
イ 被害葉や老化葉は早めに除去する。
ウ 9月の秋雨の時期は曇雨天が続くことが予想されるため、気象予報に留意し、晴れ間を見計って計画的に防除を行う。
エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



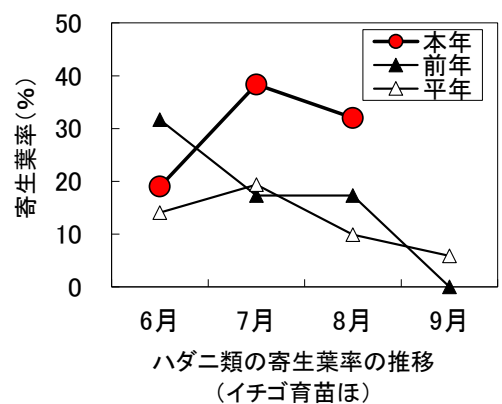
◎イチゴ

1) 炭疽病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率平年0.0%）、平年並の発生であった（±）。
- (3) 対策 ア 風雨により飛散・伝染するため、親株床、育苗床はビニールで雨よけをする。特に台風の接近には注意する（3 防除のポイント等の「イチゴ定植前のうどんこ病、炭疽病及びハダニ類の防除対策」を参照）。
イ 発病株は早期には場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。
ウ 頭上かん水を避け株元に手かん水する。
エ 育苗ポットの間隔を広げ、不要な下葉を除去し通風採光を良くする。
オ 定植苗の選抜を徹底し、り病株を本ぼや育苗ほに持ち込まないようにする。
カ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。特に、降雨後および摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。薬剤散布は株元まで十分かかるように行う。

2) ハダニ類

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、一部のほ場で多発生が確認され、寄生葉率32.0%（平年9.9%）と、平年比多の発生であった（+）。
- (3) 対策 ア 本ぼに持ち込むと防除が困難となるため、育苗期の防除を徹底する（3 防除のポイント等の「イチゴ定植前のうどんこ病、炭疽病及びハダニ類の防除対策」を参照）。
イ 薬剤防除の際は、薬液が葉裏に十分かかるように、苗の間隔を十分確保し、丁寧に散布する。
ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3) アブラムシ類

(1) 発生量：並

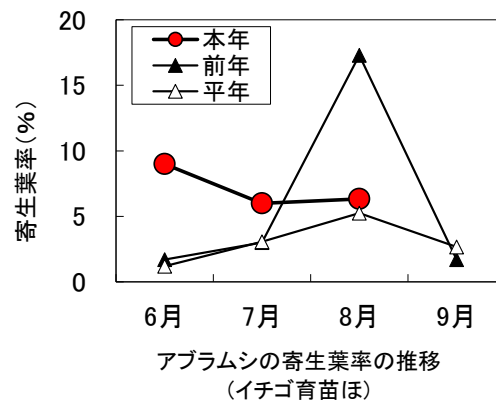
(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生葉率6.3% (平年5.3%) と平年並の発生であった(±)。

(3) 対策 ア 本ぼに持ち込むと防除が困難となるため、育苗期の防除を徹底する。

イ 育苗床や本ぼ周辺の雑草は定期的に除草する。

ウ 若い葉の裏や未展開葉に寄生していることが多いため薬剤防除の際は薬液が寄生部位に十分かかるように丁寧に散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎夏秋キュウリ (高冷地)

1) ベと病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の防除員報告では、平年比やや多の発生であった(+)

(3) 対策 ア 湿度が高い条件や肥料切れで多発するので、適正な肥培管理と排水に努め、過湿を避ける。

イ 発生後は防除が困難なので予防防除を徹底し、薬剤が葉裏に十分かかるように散布する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

◎夏秋果菜類 (平坦地)

1) コナジラミ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月上～下旬に野外に設置した黄色粘着板(10×10cm)の誘殺数は、熊本市で1.0頭/日/枚(平年3.0頭/日/枚)、山鹿市で0.5頭/日/枚(平年2.6頭/日/枚)、菊池市で0.2頭/日/枚(平年0.3頭/日/枚)と、平年比やや少であった(-)。

イ 8月の防除員報告ではナス及びメロンで平年比やや多～並の発生であった(±)。

(3) 対策 ア 密度が高くなると各発育ステージが混在し防除が困難となるため、低密度での防除を徹底する。

イ 施設内部と周辺の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

ウ 密度が高くなると防除が困難となるため、黄色粘着トラップ等を施設内に設置し、早期発見に努める。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

オ タバココナジラミはトマト黄化葉巻病、トマト黄化病の病原ウイルスを媒介するので、本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する(3 防除のポイント等の「台風接近時の虫媒伝染性ウイルス病まん延防止対策について」及び「野菜のウイルス病対策「入れない」対策をしましょう」を参照)。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

[「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」](https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html)

2) アザミウマ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の防除員報告では、ナスで平年比やや多〜並、メロンで平年並の発生であった(±)。

(3) 対策 ア 粘着トラップ等を設置し、早期発見に努める。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

イ ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを、ミカンキイロアザミウマはトマト黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類及びトマトでは本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する(3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病対策「入れない」対策をしましょう」を参照)。

ウ 施設内部と周辺の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

◎野菜類全般

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査において、夏秋トマトでは寄生株は確認されず(寄生株率平年0.0%)、イチゴでは寄生株率1.7%(平年0.7%)と、平年並の発生であった(±)。

イ フェロモントラップによる8月第1半旬〜第5半旬(※八代市は第4半旬まで)の誘殺数は、合志市で平年比やや少、八代市、阿蘇市、山都町で平年比少の発生であった(-)。

表 各地域のハスモンヨトウの誘殺状況(8月第1半旬〜第5半旬)

市町村名(地域名)	本年	平年値	平年比(%)
合志市(栄)	423.0	770.6	54.9
八代市(鏡)※1-4半旬	81.3	772.3	10.5
阿蘇市(一の宮)	508.9	1044.7	48.7
山都町(鶴ヶ田)	53.1	108.3	49.0

単位：頭、平年比(%)：(本年誘殺数/平年値)×100

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除を行う。

イ 施設栽培では、成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵し、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したらただちに除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) オオタバコガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査において、夏秋トマトでは寄生株は確認されず（寄生株率平年0.1%）平年並の発生であった（±）。

イ フェロモントラップによる8月第1半旬～第5半旬（※八代市は第4半旬まで）の誘殺数は、阿蘇市で平年比やや多、山都町で平年並、合志市、八代市で平年比やや少の発生であった（－）。

(3) 対策 ア 中齢期以降の幼虫になると薬剤の効果が劣るため、孵化直後の幼虫が薬剤に抵触するように、成虫の発消長をみて防除する。

イ 摘心、摘花した脇芽や花蕾などは卵や若齢幼虫がついている可能性が高いため、ほ場外に持ち出す。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

エ 熊本県病害虫防除所のホームページに掲載しているフェロモントラップの誘殺状況を確認し、防除の参考にする。

表 各地域のオオタバコガの誘殺状況（8月第1半旬～第5半旬）

市町村名（地域名）	本年	平年値	平年比（%）
合志市（栄）	36.0	61.3	58.7
八代市（鏡）※1-4半旬	2.6	4.4	59.1
阿蘇市（一の宮）	12.7	9.9	128.3
山都町（鶴ヶ田）	2.6	8.1	101.5

単位：頭、平年比（%）：（本年誘殺数／平年値）×100

3 防除のポイント等

水稻病害虫防除にあたっての農薬危害防止の徹底について

斑点米カメムシ類やトビイロウンカ等を対象とした防除にあたっては、農薬使用による周辺住民やミツバチ等への危害が発生しないよう、以下の事項を遵守し、危害防止対策を徹底しましょう。

- (1) 農薬を使用する場合は、関係法令等を遵守するとともに、事前に農薬を散布する日時、使用する農薬の種類等について、周辺住民等へ周知を行うこと。
- (2) 周辺の養蜂家と巣箱の位置や防除計画について、事前に情報を交換すること。また、防除を行う際には、「蜜蜂飼育関係集計表」等を基に、巣箱の位置を確認し、ミツバチや巣箱に農薬がかからないよう、ほ場周辺を十分に確認すること。
- (3) 農薬散布の際は、散布区域内及びその周辺における危害防止に万全を期すとともに、作業関係者の安全について十分留意すること。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

[「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」](https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html)

台風接近時の虫媒伝染性ウイルス病まん延防止対策について

近年、トマトやウリ科野菜における抑制栽培及び促成栽培での虫媒伝染性ウイルス病の多発要因の一つとして、育苗期や定植初期の台風接近に伴って、ビニル被覆を除去したり、定植前の苗を移動させた際に、保毒虫が侵入し、生育初期に感染してしまうことが考えられる。

これからの時期は、トマトやウリ科野菜で抑制栽培の定植や促成栽培の育苗期が始まる一方、野外での微小害虫の密度が高くなる。台風接近時には以下の対策を行い、生育初期のウイルス感染を防止しましょう。

I. 事前対策

- ①被覆ビニルや防虫ネットに破損や隙間が無い点検し、必要に応じて補修する。
- ②ハウス内の感染株は伝染源となるので、抜き取り適正に処理するか茎を切断する等して枯らしておく。
- ③台風の進路等によっては、ビニルを除去する可能性があるためコナジラミ類・アザミウマ類の飛散予防策として、防除を徹底し生息密度を下げる。
- ④台風の被害が大きいことが予想される場合、鉢上げ前の播種箱やセルトレイの苗は納屋等に移動する。
- ⑤育苗ハウスから苗を運ぶ際には、移動中にコナジラミ類・アザミウマ類が寄生しないよう、運搬車等の荷台を防虫ネットやほろ等で覆う。

II. 事後対策

- ①ビニル・防虫ネットを除去した場合、早急に再度展張する。
- ②移動しておいた苗は育苗ハウス内に運び込む。
- ③寒冷紗等の被覆を行った苗は、早急に被覆を除去する。

上記の作業が終了したら、すみやかに薬剤散布を行いコナジラミ類・アザミウマ類の防除を行う。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

[「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」](https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html)

野菜のウイルス病対策「入れない」対策を徹底しましょう

本県では「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「スイカ退緑えそ病」、「トマト黄化えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これらのウイルス病対策は、ウイルス感染植物を除去することと保毒虫を防除することが基本となります。しかし、薬剤処理による媒介微小害虫の防除だけではウイルス病を完全に抑えることは困難であるため、耕種的防除や物理的防除を組み合わせ合わせた総合的な防除対策を講じる必要があります。

特に、これからの時期はトマトやウリ科野菜で抑制栽培の定植や促成栽培の育苗期が始まる一方、野外での微小害虫の密度が高くなり、施設内への飛び込みが更に多くなるため、育苗期や定植直後にウイルスに感染するリスクが高まる時期となります。

そこで、以下の対策を必ず行いましょう。

保毒虫を栽培ほ場に「入れない」対策

上記のウイルス病は、微小害虫がいなければ感染拡大しません。そこで、野外から微小害虫を施設内に入れないようにしましょう。感染が早いほど経済的被害が大きくなるため、特に育苗期の対策はしっかり行いましょう。

1 育苗期

- (1) 育苗ハウスは、本ぽと別に設け、ハウスの開口部(サイド、換気部など)には必ず目合い0.4mm以下の防虫ネットで、天井部は近紫外線除去フィルムで被覆する。
- (2) 雑草および野良生えは微小害虫のすみかとなるため、育苗開始10日前までにハウス内・周囲から除去する。
- (3) ハウス内に粘着トラップを設置し、侵入した害虫の密度を低下させる。
- (4) 発病株は二次伝染源となるので、見つけ次第直ちに施設外に持ち出し処分する。
- (5) 定植2～3日前に、育苗期後半に登録のある薬剤を処理する。

2 本ぽ定植以降

- (1) サイド開口部は目合い0.4mm(アザミウマ対策の場合は目合い1mm以下)防虫ネット、谷換気部は、目合い1mm以下の防虫ネットで被覆する。
- (2) ハウス周辺に雑草および野良生えが残っていると、微小害虫が飛び込みやすくなるため定植10日前までに除去する。
- (3) 育苗ハウスから本ぽへ苗を運ぶ際には、野外の微小害虫が付かないように運搬車等の荷台を防虫ネットや幌等で覆う。また、定植作業中は、出入口をきちんと閉めて作業する。
- (4) 育苗期後半に薬剤処理ができていない場合には、定植時に登録のある薬剤を必ず処理する。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

[「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」](https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html)

イチゴ定植前のうどんこ病、炭疽病及びハダニ類の防除対策

イチゴはこれから定植がはじまります。重要病害虫であるうどんこ病、炭疽病、ハダニ類は定植前の防除を徹底して、り病株、寄生株を本ぼに持ち込まないことが重要です。以下の防除対策を徹底して、定植後の発生を抑制しましょう。

1 うどんこ病

- (1) 発生しやすい葉裏を注意して観察し、初期発生を見逃さないように努める。
- (2) 発病葉や不要な下葉は早めに取り除き処分する。
- (3) 定植前に薬剤防除を徹底する。薬剤は葉裏に十分かかるように散布する。
- (4) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

2 炭疽病

- (1) 定植までは育苗ほの雨よけを必ず行う（寒冷紗は雨よけにならない）。
- (2) 育苗床が冠水しないように排水対策を講じる。
- (3) 頭上かん水は避け、株元に手かん水する。
- (4) 定植まで定期的に薬剤による予防防除を行う。特に、降雨後、摘葉後、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。
- (5) 発病株は速やかにほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。
- (6) 苗不足により、緊急的に苗を確保する場合は、炭疽病が発生していないほ場から確保する。
- (7) 台風接近時には、育苗中の苗は可能な限り納屋等の屋内に移動させる。万一、移動ができない場合は、苗を防風ネット等で被覆し軽く押さえるように固定するとともに、台風通過後は、速やかに被覆資材を除去し薬剤散布を行う。

3 ハダニ類

- (1) ほ場内および周辺の雑草は定期的に除草する。
- (2) ハダニ類は下葉の裏に多く寄生しているので、老化葉は積極的に除去する。
- (3) 除去した下葉は、ほ場外に持ち出し、速やかに処分する。
- (4) 薬剤防除の際は、薬液が葉裏に十分かかるように、苗の間隔を十分確保し、丁寧に散布する。
- (5) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、気門封鎖剤などの物理的な防除効果を持つ薬剤を積極的に活用する。気門封鎖剤は、ハダニ類に直接付着しないと効果がないため、特に丁寧に散布する。また、卵への効果や残効性が無いため、5～7日の間隔で複数回散布する。なお、気門封鎖剤は、高温時など薬害が生じやすい条件での使用は避ける。
- (6) 殺ダニ剤は、同一系統薬剤の連用を避け、育苗から本ぼまでの栽培期間を通し計画的に使用する。
- (7) 本ぼで天敵（チリカブリダニやミヤコカブリダニなど）を利用する場合は、薬剤の使用にあたって、使用する薬剤の天敵への影響日数に注意する。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」

Ⅲ 【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
普通期 水稻	斑点米 カメムシ類	並	巡回調査では平年並(±)。 防除員報告は、平年並(±) 常発地帯では2回目の防除を穂揃い期の7～10日後に行う。
大豆	紫斑病	並	防除員報告では平年並(±)。
	べと病	並	防除員報告では平年並(±)。 湿度が高いと発生が助長されるため、降雨後、発病が拡大しないうちに防除を行う。
	葉焼病	並	防除員報告では平年並(±)。 防除が遅れると効果が低下するので、発生が確認されたら直ちに防除を行う。
茶	チャノホソガ	並	巡回調査では平年並(±)。 フェロモントラップ調査 合志市：平年比少(－) 御船町：平年並(±) 新葉が加害されるので、開葉期と2～3葉期に防除する。
	チャノコカク モンハマキ	並	巡回調査では平年並(±)。 フェロモントラップ調査 合志市：平年並(±) 御船町：平年比やや少(－) 発蛾最盛期の7日～10日後に防除する。
カキ	炭疽病	並	防除員報告では平年並(±)。 降水量は平年比多～並(+) 発病枝は園外で処分し、病原菌の密度を下げる。 発病後の防除では効果が低いので、予防散布を徹底する。
イチゴ	うどんこ病	並	巡回調査では平年並(±)。 防除については、3 防除のポイント等の「イチゴ定植前のうどんこ病、炭疽病及びハダニ類の防除対策」を参照する。
夏秋 果菜類 (高冷地)	コナジラミ類	並	巡回調査ではトマトで平年並(±)。 現在発生しているほ場では、早期に防除する。
夏秋ナス (平坦地)	すすかび病	並	防除員報告では平年並～やや少(±)。 葉裏にも十分かかるよう薬剤散布を行う。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」

作物	病虫害名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
夏秋 キュウリ (高冷地)	うどんこ病	並	防除員報告では平年並(±)。 初期発生を認めたら直ちに薬剤防除を行う。
【野菜病虫害の共通対策事項】 <ul style="list-style-type: none"> ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める(病害)。 ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。 			

IV その他

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎ 詳しい内容等については 病虫害防除所(農業研究センター生産環境研究所予察指導室)
(TEL: 096-248-6490) にお問い合わせ下さい。

※なお、本文及び各種トラップのデータ等はホームページ「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」上に掲載しています。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」